

ロンドンオリンピックをターゲットにした都市再生政策を進めるバジルドン市

ロンドン事務所 所長補佐 鹿野 美穂(岐阜県派遣)

2012年ロンドンオリンピック・パラリンピックまであと1年半となり、ロンドンではオリンピック会場の建設や市内の交通網整備が進められています。開幕までちょうど2年となった2010年7月末には記念イベントがロンドン市内で開催され、パリやブリュッセルとロンドンを結ぶユーロスターの発着駅であるセント・パンクラス駅に、オリンピックのオフィシャルショップ第一号店がオープンしました。2010年9月中旬にはオリンピックおよびパラリンピック開催期間中の一般ボランティアの募集が行われ、必要人数7万人に対して、1カ月半で24万人以上がボランティア登録をするなど、オリンピック開催に対するロンドン市民の期待も高まっています。

こうした中で、ロンドンオリンピックの開催を好機と捉え、都市の再開発を進めている自治体があります。エセックス(Essex)県バジルドン市(Basildon)は、ロンドンに近いという地理的好条件を活かし、従来から企業誘致を積極的に行ってきた産業都市ですが、ここでは今、ロンドンオリンピックに向けた再開発を進めることで、さらなる地域の発展や改善を図ろうとしています。

バジルドン市の概要

バジルドン市はロンドンの北東部、東イングランドのエセックス県内に位置しています。1949年に4つの街が合併して誕生し、ロンドンの人口集中を緩和するためのニュータウンに指定されました。ロンドンから電車で35分という利便性から、ロンドンへ通勤する住民が多く住んでおり、現在約17万2千人

の人口は増加傾向にあります。また、高速自動車道路M25(大ロンドン圏の環状高速自動車道路)へのアクセスも良く、ロンドンの北に位置するスタンステッド空港へは車で約45分、ロンドン・シティ空港へは約50分、ロンドンの南に位置するガトウィック空港へは約1時間で行くことができます。また、現在建設中のヨーロッパ最大規模となるロンドン・ゲートウェイ港へも約6.4kmと近く、主要幹線道路、鉄道、空路、海路のアクセスに優れています。

フォードモーターは40年以上前からバジルドン市にヨーロッパにおける研究開発拠点を設置しており、その他に農業機械メーカーのニューホランド・アグリカルチャー(New Holland Agriculture)、情報通信のファースト・データ(First Data)、電子部品のエムケイ・エレクトリック(MK Electric)、コニカミノルタなどの大手企業が進出しています。企業の研究開発支出は年間10億ポンド(約1,350億円)に相当し、バジルドン市に7万5千人の雇用を生み出しています。中小企業も多数あり、市は資金調達



バジルドン市役所

や資金融資の相談、雇用法に関する研修、販路開拓のためのマッチングイベントなどの支援を行っています。

また、エセックス県と中国江蘇省が友好都市であることがきっかけで、2009年にバジルドン市の幹部が中国江蘇省常州市政府を訪問し、両市の企業の取引を視野に入れた経済交流連携を開始しました。インドの自治体とも同様に経済を中心とした連携を考えています。

都市再生政策

バジルドン市はテムズ・ゲートウェイ再開発地域(注1)の一部であり、市内中心部のバジルドン地区(バジルドン駅周辺の地域)とバジルドン・スポーツビレッジを中心とした地域において、市主導で総額20億ポンド(約2,700億円)の都市再生政策が進められています。都市再生政策の目的は、新たなビジネスや雇用機会を増やすことと住民に十分な住宅供給を行うことにあります。

バジルドン地区における予算総額10億ポンド(1,350億円)、20年間の再開発計画では、すでに実施または建設許可を受けている700戸に加えて1,900戸の住宅建設用地を含め、宿泊施設、小売店舗やレジャー施設用の5万2千㎡の面積、5万4千㎡のオフィス面積、公園などの開発が予定されています。また計画には、バジルドン市に進出している企業が集まる工業団地の再整備も含まれています。

(注1) テムズ・ゲートウェイ再開発地域：テムズ川の両岸にまたがり、ロンドン東部からエセックス県南部、ケント県北部まで広がる地域を指し、ヨーロッパで最大級の都市再生開発計画が進行中である。

バジルドンスポーツ・ビレッジ

バジルドン市は以前から体操競技が盛んな地域で、バジルドン・スポーツビレッジは東イングランド最大のスポーツ施設として、地域の人々に対して健康増進とスポーツの機会を提供することを目的とするとともに、2012年のロンドンオリンピックでの各国選手団のトレーニング地の誘致を目指して、建設が始まりました。最新の施設・設備とオリンピック会場となるロンドン東部のストラットフォードま

での近さ(電車で30分、40kmの距離)が最大の強みとなっています。

スポーツビレッジは総額3,800万ポンド(約51億3千万円)のプロジェクトで、2009年10月に着工され、2011年4月に完成予定です。中心となる施設は、50mのスイミングプール、地域における体操競技のトレーニング拠点となる体育館、100台の機器を設置するフィットネススペース、多目的ルームなどから成ります。スイミングプールはプール内を仕切ることによって短水路(25m)としての使用も可能で、可動床を採用して深さを調節でき、国際大会から幅広い年齢層を対象とした地域住民の利用まで、さまざまな目的での使用が考慮されています。

体育館の多目的スペースは、バドミントンコート8面の大きさで、バレーボール、バスケットボール、柔道、卓球、レスリング、フェンシングなどにも使うことができます。屋外の陸上競技場には750席の観客席を新たに作り、サッカー場やフットサルコートも整備する予定です。スポーツビレッジ内に宿泊施設はありませんが、周辺にホリデイ・インやプレ



バジルドン・スポーツビレッジのメインとなる施設



建設中の50メートルプール



陸上競技場は以前からあったが、今回の再開発で施設を大幅拡充し、スポーツビレッジとして整備する

ミア・イン（イギリスとアイルランド国内に展開するビジネスホテルチェーン）等のホテルが数多くあり、宿泊キャパシティも十分です。また、近隣にあるMRIやCT機器を備えた病院との連携協力が取られており、緊急時の体制も整っています。スポーツビレッジの建設には、住宅・コミュニティ庁やエセックス県、スポーツ・イングランド（注2）などからの補助金を受けています。

（注2）スポーツ・イングランド：以前はスポーツ・カウンシルと呼ばれていた組織で、国営くじや国の補助金等を活用し、優秀なスポーツ選手の育成や国民にスポーツをする機会の提供を目的としている公的機関。

バジルドン市の事務総長

2005年からバジルドン市の事務総長（Chief Executive）（注3）を務めるバラ・マヘンドランさんは、バジルドン市の再開発を積極的に進めると同時に、中国やインドと地元企業との取引促進など海外との経済連携も視野に入れ、地域経済の発展を目指す創造的なビジョンを持っています。2010年10月には、文化や芸術、スポーツ、ビジネス、コミュニティなど9つの分野で顕著な功績をあげたイギリスのアジア系住民を表彰する「Asian Achiever Awards」において、バラさんは、バジルドン市におけるリーダーシップと地域における犯罪の減少への貢献が評価され、金賞を受賞しました。

36年前の18歳の時にスリランカから機械技師として来英したバラさんは、26歳の時に公務員に転職し、ロンドンのランベス区の住宅開発担当を皮切りに、

自治体の住宅供給や地域開発に携わってきました。多民族国家であるイギリスでは、自治体においてもエスニック・マイノリティを含むさまざまなバックグラウンドを持った人々が働いています。しかし、地方自治体の事務方のトップである事務総長を務めるエスニック・マイノリティの割合はさすがに少なく、多民族が多く集まるロンドンやバーミンガム、マンチェスター、リバプール、ブラッドフォードなどでさえも少ないという調査結果があります（注4）。事務総長としてバジルドン市の発展に力を尽くしてきたバラさんのこれまでの努力が窺われます。

（注3）事務総長は行政各部の長で、約90%の地方自治体で設置されている。役割は事務局の統括、地方自治体業務全般に係る総合的判断や調整等である。事務総長は複数の自治体を渡り歩くことも稀ではない。（参考：「英国の地方自治（概要版）2010年改訂版」（財）自治体国際化協会ロンドン事務所 <http://www.jlgc.org.uk/jp/information/img/pdf/J2010.pdf>）

（注4）市民団体が行った調査によると、イギリスにある約400の自治体の事務総長のほとんどが白人であり、Black and minority ethnic (BME) が人口の31%を占めるロンドンでも、33の自治体（グレーター・ロンドン・オーソリティおよびシティ・オブ・ロンドン・コーポレーションを含む）でBME出身の事務総長は1自治体のみであった。（参考：The Guardian 2010年10月11日）

おわりに

イギリスでは2010年5月に13年間続いた労働党政権に代わり、保守党と自由民主党による連立政権が誕生しました。連立政権では、多額の財政赤字を削減するため、6月に公表された緊急予算案では徹底した歳出削減策を打ち出しました。さらに10月には現政権の任期終了までに国の財政赤字をほぼ解消させることを目指した「支出見直し」（Spending Review）が発表され、自治体に対しても国からの補助金が4年間で28%削減（毎年度平均で7%減）されることが決定しています。

自治体には抜本的な歳出削減が求められ、経済危機以降、自治体を取り巻く環境は厳しさを増しています。しかし、バジルドン市ではこのように将来を見据えた投資が行われており、その長期的な成功を願ってやみません。バジルドン・スポーツビレッジが完成する今年春には、バジルドン市をまた訪問し、完成した施設を見たいと考えています。

✈️ 海外生活
だより

ロンドン事務所

英国温泉訪問記

ロンドン事務所所長補佐 赤池 勇治(静岡県派遣)

はじめに

温泉地を多く有する静岡県から派遣されていることもあり、ヨーロッパの温泉地にはかねがね興味を持っていました。しかし、ドイツ、フランス、イタリアなど他の欧州諸国とは違い、英国で温泉利用が行われている話はあまり聞こえてきませんでした。

ドイツであればバート (bad) やバーデン (baden)、フランスではバン (bain) といった、入浴を意味する単語がつく地名に注目すれば、大抵そこは温泉地。例えば、バーデン・バーデン、バート・ナウハイム、それから2002年のサッカー・ワールドカップフランス大会で、日本代表が合宿をしたエクス・レ・バンなど。

英国で温泉を探すなら、レミントン・スパ、タンブリッジ・ウェルズなど「spa」や「well(s)」の名がつく町を探せばよいのですが、あいにくそれらが取れてしまった所がほとんどなのです。かろうじて、鉄道の駅名に残っていたり、観光パンフレット等で引き続き名前を使っている所として、ドロイトウィッチ・スパ、チェルトナム・スパなどを見つけることができました。

実際に温泉地を訪ねてみると…

さて、そのチェルトナム・スパは、日本でも人気のコッツウォルズ地方にある西の玄関口。11月、そこに今も残る飲泉所の「ポンプルーム」を訪ねてきました。係員のジュリーさんによれば、当時の医師により飲泉はお腹に良いとされ、18～19世紀には「ミラクルウォーター」とも呼ばれ人々の間で大量に飲まれていたようです。彼女の祖父

母や両親の子供時代にも、わざわざこの施設に来て1日3杯の温泉水を飲んだ、という昔話を聞かせてもらいました。私もぜひ試したかったのですが、衛生上の理由で現在飲泉は不可とのこと。残念！

ポンプルームは飲泉施設であ



チェルトナム・スパの飲泉所
(左・ジュリーさん)

るとともに、喫茶室や談話室、読書室もありました。現在、この建物はチェルトナム市の所有です。内装が美しいホールは、今も会議、結婚式に使われているそうです。「チェルトナムでは一番良い建物だと思うわ！」と、彼女は胸を張っていました。

続いて、イングランド中西部・レミントン・スパへ。ここでは、近年まで温泉を使った入浴や治療が行われていました。ポンプルームでは温泉プールやヴィシー・シャワー（ベッドに横たわり、その上から注がれるシャワーで血行促進を促す）、部分浴（両手、両足を温泉に浸す）などの装置が備えられ、主に温泉を使ったりハビリテーションが行われていました。しかし、1970年にその役目を終え、現在、ポンプルームは温泉地の歴史を紹介する博物館兼美術館、カフェ、観光案内所の複合施設になっています。建物脇に残されていた小

さな飲泉用の施設（現在も飲泉可）が、温泉地の名残としてひっそり佇んでいました。口に含むと、薄い食塩水のような味でした。

また、同じくイングランド中西部のドロイトウィッチ・スパでは、ローマ時代から塩分濃度の高い温泉を利用した製塩業が盛んでした。この温泉には1リットルあたり305gもの塩分が含まれていました。同量の海水の塩分が28gから35g程度ですから、なんと約10倍(!)の濃さです。ドロイトウィッチ・スパには「ブライン（塩水）バス」という、温泉水を使った施設が2008年まで営業され、リラクゼーションとしての利用や、医師の指示に基づいた術後のリハビリテーションが行われていました。観光案内所で話を訊くと「ブラインバスの塩分濃度は死海に匹敵し、浮力で体が完全に浮いてしまうほど。この温泉は塩分が濃すぎたので、飲用には不向きだった」とのこと。病院併設のこの施設は、建物の安全性等の理由で現在も閉鎖中ですが、住民の関心も高く、町当局も観光誘客対策の一つとして、再開に向け協議が続けられています。地元のホテルも再開に関心を示しているとも伺いました。

最後の砦、バース

英国各地の温泉が廃れていく中、唯一、温泉を積極活用しているのが、世界遺産としても知られるイングランド南西部のバース（Bath）です。ローマ時代からの大浴場「ローマン・バス」は、1976年まで入浴ができたのですが、水質上の理由から中止に。その後、何度か温泉施設建設に向けての動きがあり、最終的に2006年に現代的な設備を備えた温泉施設がオープンしました。バースでは46度の温泉が今も湧出し、「英国で唯一の天然の温泉」とうたう同施設には、温泉を使ったプールやミストサウナ、美容のためのトリートメント施設等が備えられています。屋上の温泉プールからは美しいバースの町並みを一望できます。しかし、プールの湯温は33～34度ですので、特に冬場に訪れる場合はご注意ください。また、温泉水を含有したシャンプー、シャワージェル、スキンローションなどの販売も始めていて、貴重な天然資源を



バースにある入浴施設の入口

無駄なく活用している感じを受けました。

なお、新聞によれば、年間入場者数15万人、地元経済への波及効果が650万ポンド（約10億円）、さらに来場者の約7割が同施設を利用するためにバースを訪れたという調査結果もあり、この施設はすでに観光の目玉となっています。ローマン・バス博物館では古代ローマ時代からのバースの変遷の歴史をじっくり学ぶことができますし、ポンプルームでは飲泉も可能。毎日開催される市主催の無料ウォーキングツアーに参加すれば、さらに充実した訪問になります。

おわりに

温泉利用は日本では、古くは湯治に始まり、高度成長期の歓楽・娯楽的な利用を経て、現代では健康維持や健康増進といった視点が入り入れられてきています。対して欧州、主に大陸諸国では、医学的根拠に基づいた伝統的な温泉治療も続けながら、健康づくりや病氣予防、保養といったウエルネスにも力を入れ始めています。今回のフィールドワークを通じて、出発点は異なるものの、日欧どちらも「健康」をキーワードにした温泉利用に向かっていると感じました。

日本の温泉活用に何かヒントになることは、という思いで足を運んだ英国の温泉地。ドロイトウィッチ・スパなど英国の温泉の復興を願いつつ、大陸諸国にも足を延ばし、新たな温泉利用の方法や、温泉を活用した地域づくりについての見聞を広めたいと思っています。